

2013年9月より Massachusetts Institute of TechnologyのDepartment of Nuclear Science and Engineeringの博士課程に所属しています曾根 彬です。現在はPaola Cappellaro教授の指導の下で固体系の核スピン・電子スピンの量子制御理論の研究に携わっております。さて、MITで春学期中に起きたことで印象に残ったこと、そして春学期が終わってからの余暇ついて、またそこから感じ取ったことなどについて少し話してみようと思います。

学期が終わり、学生たちに陽気な笑顔が戻った。今思えば、学期中、私が毎日見ていたのは曇りかえった顔つき、そして赤く染まった血眼であった。自分もその中の一人であった。毎日山のように積み重なる宿題を前につい弱音を吐いてしまう自分いながらも、心の中では夢に向かって前進する自分がいた。それは如何にも、先の見えない大砂漠に一人の人間が取り残され、絶望に満ちた崖の上の立たされながらも、目の前に広がる砂漠のどこかに必ずオアシスがあると信じ続けながら、一步一步精一杯に前進しているようなものであった。もちろん、それは私だけではない。多くに学生に当てあはまるものであった。すべての人がこの苦境を乗り越えられるわけではない。倒れてしまう人もいた。そして、彼は永遠に起き上がることはなかった。永遠の別れは辛いものであったが、それが現実である。

私も何度か倒れそうになったが、生き延びた。ある冬の日のことである。誰かに呼び起こされ、目を開けば私は床に倒れていたことに気づいた。二人の清掃員が私のそばに立ち、私の安否を気にしている。微かではあったが、彼らが困った顔をして、どうしてよいのか途方に暮れていたのを私は知った。耳はナイフが突き刺さるほど痛み、目の前は曇っていた。そして、酷く乾いていた。研究室の中はベートーベンの第五交響曲『運命』が鳴り響いており、そして私の周りは散かっていた。一人の清掃員は起き上がった私を抱え、もう一人の清掃員は私の唇に一口の水を含ませた。今思えば、それは命の水であった。二人の清掃員の方には一生感謝しても感謝しきれない。どうも私は失神してしまい、机から滑り落ちたようだ。それは早朝3時のことであった。辺りは暗黒に染まりかえっており、私の目にはぼやけたオリオン座が映り、それは蒼白く眩しかった。私は弱音を発したかった。なぜなら、自分の全てを疑っていたからである。しかし、『運命』はそれを許さなかった。現実と戦い続け、夢を勝ち取るために精一杯前進する自分の魂がそれを許さなかった。そして、散かっていた山のように積み重なった参考書をかき集めて、私は再び机に向かった。MITでの学生生活は決して容易いものではない。毎日、その精神的な圧力と肉体的な疲労は学生を悩ませ、学期の途中でボストンを去る学生も少なくなかった。そして、自ら命を絶ってしまう学生もいた。決して誇張しようとしているわけではない。赤裸々の事実である。毎日見る学生の表情や発する言葉の数々がその過酷な現実を物語っているであろう。そして、その中で奮闘し、学生同士が互いに励ましあい、助け合い、今のMITがあるのだ。誰もが思うこと、それは夢を決してあきらめたくない。それだけである。

そんな過酷な学期も終わり、学生に笑顔が戻り、陽気な雰囲気が校舎に充満した。スポーツを楽しむ人、ひたすらパーティーに行く人、旅行に行く人、そして故郷に帰る人と学生達は長い夏休みを思い存分楽しもうとしていた。私もその中の一人であった。その中でも印象に残っているものは友達と行ったハーバード大学のArnold Arboretumである。



Arnold Arboretumにて (右から二人目が筆者)

Arnold Arboretumはハーバード大学が所有している公園で、アメリカの著名な造園技師Frederick Law Olmstedが1872年に設計したもので、世界から約15000種類もの植物を集めた植物公園である。MITから地下鉄で約40分離れた場所にあり、地下鉄から降りれば、駅の中には潤んだ草花の香りが宙に漂っていた。駅を出て、少し歩けばそこには緑が広がり、私たちは、森の中に足を運んだ。そこにはピクニックを楽しんでいる家族、犬の散歩をしている夫婦と多くの人々が自然と触れ合っていた。草花は小鳥の囀りが奏でるワルツに合わせて、風と太陽の光の手をとり踊り、子供たちは風に舞う蒲公英の種を追いかけてながら駆け回っていた。そして、私達はというと、小さな花に止まっていた小さな蜂を撮ろうと花に近づいた瞬間、蜂に見つかり、蜂に追いかけられながら走り回っていた。まだやんちゃな子供の頃の自分そのものであった。蜂が去り、落ち着いた頃には、一人一人が幼年期の自分を懐かしく思っていた。童心に戻り、小さい頃の思い出話や自分の将来の夢を語り合いながら、私たちは美しい大自然に身を任せ、森の奥へと進んでいった。

森の奥に進むと、そこには竹林が広がっていた。あらゆる植物の中で、私は竹が一番好きだ。竹の青々とまっすぐ伸びるその姿は私にとって言葉に表せないほど美しく、そして逞しい。皆は他の植物に目を引かれていた。しかし、私にとってこの竹林は他の何よりも魅力的であった。鳥の囀りを耳にし、微かに吹く風の冷たさを身に感じながら、竹林の中にいることが私にとって幸せそのものであった。何故幸せなのか、それは自分でも明確な答えを出せないが、ただ、いつもならば振り返りもせず素早く走り去って行く時間がこの竹林の前で私と共に立ちすくみ、大自然からその美の洗礼を授かっているように感じたのである。Charlie Chaplinに”My only enemy is time”という言葉がある。学期中の私にとって時間は確かに敵であった。しかし、この大自然の前では、いつの間にかその時間は友となった。その時である。微かに風が吹き、私の耳に微かに風鈴のような音が聞こえた。よく見ると、小さな枝に風鈴が引っかかっていた。とても小さな風鈴で、おそらくここに遊びに日本から来た人が置いていったと思うが、他郷の地であるアメリカで風鈴の音を耳にするのは私にとって印象深かった。感動のあまり、私は即興で五言絶句を詠んだ。

涼風微々吹
鳥儿歓声語
忽聞風鈴声
方知春已去

この詩が語るように、風は涼しく、小鳥は囀りながら如何にも何かを愉快地語り合っていた。まだ春の雰囲気が漂っていたが、ふと風鈴の音を耳にした瞬間、もう春は過ぎ去り、夏の到来を知ったのである。風鈴の音は夏の到来を伝えただけではなかった。私はふともうすでに MIT での一年目が過ぎ去ろうとしているという事実気づいた。最初に MIT に来た頃、何もかもゼロから始まった頃、それは私にとっての春であった。そして、その春は今に過ぎ去ろうとし、多くの貴重な経験を積み重ね、今もう一段階成熟した自分がここにいるのだと気づいたのだ。遂に、人生での夏を迎えることになったのだ。そして、この人生の初夏で、初心を忘れず、何事にも落ち着いて、より成熟した行動と判断ができるようにしなければならない、それが私の新たな小さな目標となった。

さて、竹林を後にし、私たちは森の外に出た。森の外の芝生に皆寝転がり、草花の香りに酔いながら、そして西に沈む夕日を眺めながら、誰一人言葉を発さなかった。MIT で物理学を学ぶ私たちにとって、改めてその自然の偉大さを身をもって感じたのだ。いつもならば、私達のような物理学を専攻する博士課程の学生というのは、黒板に書かれる様々な公式の数々や実験室で読み取る数値データから自然界で起こっている現象を説明、解釈、そして理解しようとしている。しかし、いざ大自然に身を投じ、目の前に広がる大自然の美を目の当りにしたとき、自分たちがどれほど小さいかを知るのだ。そして私達は小さいながらも自分の知識で持つてこの偉大なる自然に再び挑戦すると誓うのである。私の尊敬する物理学者に John Wheeler がいる。彼は、一般相対性理論と量子重力理論の研究に多大な貢献を残した 20 世紀もっとも偉大な理論物理学者の一人である。彼の言葉に次のものがある。

“We live on an island surrounded by a sea of ignorance.

As our island of knowledge grows, so does the shore of our ignorance.”

彼が言うように、私達は自然について知れば知るほど、益々無知になっていくのである。しかし、私達のように物理学を学ぶものにとってこの「無知になる」ということはむしろ喜ばしいことであるかのように思える。無知になればなるほど、私達はもっと知りたくなり、そして私達はひたすらその解を探し続けるのである。そして、それが私達にとって何よりも楽しいのだ。あの大自然を前に、私達の一人一人が言葉を失った。自然の偉大さを感じたと共にその威厳に圧倒されたのだろう。ただ、誰もが心の中に何か呟いたように見えた。その中で、私は「知りたい」と呟いた。「知りたい」、これは私の初心であり、この大自然に広がる様々な現象をとにかく色々知りたいというのが私が物理学を目指したきっかけであった。そして、この大自然の前に私は再び初心に戻ったのである。

そろそろ帰る頃となり、私達は次第に沈む夕日を眺めながら Arnold Arboretum に別れを告げた。研究室に帰ってきた私は再びあの机に向かった。あの時失神し、滑り落ちたあの机に向かった。あの時の悪夢が一瞬横切ったが、それはすぐに消え、積み重なる参考書を目の前に、むしろ楽しさだけがかった。そして、今この文章を書いている。おそらく、この文章を書き終えれば、私は再び研究に戻るであろう。そこでまた、何か新しいものを知ると同時に私の無知の岸边は広がるはず。そして、この広がり続ける無知の岸边こそが私の存在を証しするものであると私は強く信じている。

マサチューセッツ州ケンブリッジにて、2014年6月19日

奨学生 曾根 彬